

特集に当って

新村 秀一

本号は、新編集長の柳井先生と私の合作です。テーマも私の提案した“医学”に“医療のOR”を先生がつけ加えられ“医学・医療のOR”としました。

OR学会のトップは、若手のオッチョコチョイの企業人を起用することも、OR活性化策の1つであると考えておられるようです。そこで、私がこの特集に際してを書くことになりました。蛇足ながら、私がそのように見られたのは、モニター委員会に積極的に参加したのが原因ではないかと思えます。いま、モニターをやっておられる“あなた”も数年後に特集を担当するかもしれませんよ。

さて、本誌の使命は何でありましょうか。柳井先生は「OR学会員の手によりOR学会員以外の人にも読んでもらえる雑誌づくり」を方針にあげられています。

今回の編集方針は、「ORを待ち望む医学」としました。私の独断と偏見ですが、日本のOR学会員はもう少し積極的に医学分野に入ってもよいのではないかと考えています。医学分野は学際的であり、多くの問題をかかえ、情報処理や統計応用に場を提供してきました。東大医学部の開原先生によりますと、アメリカでは医療とORに関して1冊の本が出ているそうです。しかし日本では、それほどのOR応用は見うけられません。「その辺をもう少し掘りさげて特集を組んでみたら」とのアドバイスを受けましたが、今回は時間的制約もあり、OR学会員の方が医学分野へ親しみを感じてもらうことを第一義としました。

医学の分類には、①健康のための医学、②予防医学、③治療医学、④リハビリテーション医学、という見方と⑤基礎医学(解剖学、生理学、病理学、薬理学等)⑥臨床医学(内科、外科、産科、眼科、婦人科等)⑦社会医学(公衆衛生学)という見方があります。

私たちに身近な医学は、③であり⑥であるところの医療であります。そして、そこで大きな役割を果している病院の多くは、赤字経営に悩んでいます。ここに紹介します聖マリア病院は、病院経営にビジネス感覚をもち込むことにより、健全経営の維持に努めておられます。

井手さんに最初にお会いした印象は「へたな企業家よりもよほど企業家らしい」ということです。これを読者各位も紙面から十分共通体験してもらえると考えています。さらに、病院経営(たとえば看護婦の配置等)の立場からORへの問題提起をお願いしたかったのですが都合もあり次の機会にと考えています。

医療費のかんりの部分を医薬品が—最近では情報機器が占めております。久慈さんは医薬品市場の特殊性をあますことなく指摘しておられ、かっこうの入門的知識を提供していただきました。またORを待ち望む医薬品問題としていくつかの問題提起をしていただきました。どなたか久慈さんに接触され、これらの問題解決を行なうことがOR学会員としての使命ではないかと思えます。

さて、日本でも医学におけるORの適用はいくつか見うけられます。「医学のあゆみ」の計量診断特集号には、

- ①梶谷 他：循環器疾患のマルコフモデル
- ②古川 他：ワイブル分布による罹病期間の予測
- ③田中 他：モンテカルロ逐次検定法
- ④広沢 他：マルコフ連鎖を用いた薬効評価等が掲載されています。

鶴田さんののは、医学領域でのOR研究としては最近のものになります。整数計画法を現実の問題に適用していくことがこれから必要と考えていますので、お願いしました。また「利用できそうな手法を探し、それに問題を当てはめることなく、問題の本質的な構造を見きわめた定式化を行なうことである」との指摘は、本誌読者にとっても傾聴に値すると考えます。

さて医学において本来重視すべきは「健康の医学」であります。しかし、健康に対する評価尺度は、疾病に比べ不明瞭なため、なおざりにされてきたようです。勝田先生のものは、今後のこの種分野へのアプローチの1つを提示されているものと位置づけられます。

拙稿「医学における診断とは」によるものは、読者にご批判いただくものとし、1行の余白をあけておくことにいたします。